

「歩いて遊ぶ＝ 東京 思い出の記」より

三月の吉野梅郷

奥多摩の入り口にある青梅市の日向和田から、二俣尾の東西四キロに広がる地域を、吉野梅郷という。関東一の梅の里である。JR日向和田駅を降りると、梅の香りが漂いはじめる。駅前の青梅街道をわたり、多摩川に架かる神代橋を過ぎると、紅梅の街路樹が迎えてくれる。吉野梅郷には「青梅市梅の公園」と地元農家の梅園を觀賞する散策道がある。「青梅市梅の公園」の小高い丘に、紅色・白色・ピンクの梅が三月中旬には、ほのかな香りを一面に放ち、咲き乱れる。丘から眺める梅林は、まさに絶景である。このような、壮観な梅花の景色を見る場所は少ないだろう……。水戸の偕

本 松 茂 敏 (S 3 6 年卒)

樂園とは、また趣が異なる。陽あたりの良い場所で、梅林を一望するとき、肌で春の気配を感じる。丘を下り、出店で賑わう道をとおり過ぎ、観梅の散策道に入る。多くの庭先から、しだれ咲く、梅の花が零れ落ちるほど、咲いている。西にさらに歩くうち、吉川英治記念館にたどり着く。吉川英治が昭和二十五年からNHKの大河ドラマで有名な『新平家物語』を七年間、この地青梅で執筆活動をしていたと知る。記念館でUターンして日向和田に戻る。人の行き交う、この観梅時期の賑わいに比べると、日常は人気のない、静かな、山間の郷であらうと感じる。

定時制文芸誌「文窓」より

労 働

豊 坂 博 治 (S 3 4 年卒)

一かけらも搾取のない 時間と空間の中で
俺の労働を作りたい
しかし空しい空しい
ほら!! 搾取の洪水 ダムは破れた
水量は高まる高まる
脱げ上着を脱げシャツを
脱げパンティを 俺は俺を脱ぎたい
ころび汗にまみれ また倒れ……
俺の労働を作りたい
血まみれになる 血の海を漂流する
血と水と、理智と欲望 すべてのかんかくは
ぼろぼろにくだけくだけて
俺を見失いそうだ

ねばねば汗の泥海で俺の 無数のかんかくは
理性と情熱を喰い込む ずっしりと重くなる
足もとがゆれ出す
俺は裸だ 神の太陽が輝くとき
いつしか搾取の洪水は乾れ
圧縮した時間の中で
俺の労働のデッサンを表現する
生の不滅と 労働の苦しさと勝利を
俺が俺という血の光りが
神と自然の行動の中で

(昭和34年3月発刊)

【お願い】 定時制文芸誌「文窓」の創刊号(第1号)、2号、4号、7号、8号が学校にありません。もし、お持ちの方がおられましたらコピー保存したいと思いますので、同窓会事務局までご連絡をお願いします。